

動物介在療法 (Animal Assisted Therapy)

～特別養護老人ホームでの小型犬を用いたAAT支援の実践～

新山雅美*

Animal Assisted Therapy :

Practical Procedures for AAT

with Small Dogs Taken on Visits to a Nursing Home

Masayoshi Niiyama, Professor

Rakuno Gakuen University, School of Veterinary Medicine

The objective of this paper is to evaluate practical procedures for animal assisted therapy (AAT) with small dogs taken on visits to a nursing home.

Methods involved (1) taking the history of whether the senior residents had kept an animal before entering the nursing home; (2) recording the degree of bonding and the pattern established between the dogs and each resident, as shown by the person's responses and actions; (3) setting specific AAT goals, e.g., relief of depression, decrease of abnormal actions, making friends, rehabilitation, and enhancing the quality of life; (4) observing self-initiated actions, favorable responses, latent ability of the resident, and noting optimal interchange between the person and animal; (5) perpetuating optimal and favorable interchange, as shown by counting the incidence of good responses; (6) extending the effectiveness to daily life.

Patterns of interchange with the small dogs included looking, touching, holding the animal on the lap, giving food to the dog, and playing with or walking the dog. Suitable use of treats enhanced communication between resident and dog and initiated communication between residents. Residents were allowed to give treats to the dog when saying "OK" after commanding the dog to "sit" or "wait", and this procedure enhanced the person's pride considerably. Playing with the dog provided a rich menu of interchange.

キーワード

動物介在療法 animal assisted therapy

高齢者 elderly resident

犬 dog

交流 interchange

特別養護老人ホーム nursing home

I. はじめに

日本は少子化で高齢者比率の高い社会を迎えた。この高齢社会は、慢性的に進んで行く病気を抱えた人達の比率が高い社会である。また情報化が進み、個人が多くの情報に曝され煽られて翻弄されやすい社会でもある。このような事情を背景にしてか、精神的な安寧を含む全人的医療の重要性が認知され、その一手段として動物介在療法（Animal Assisted Therapy；以下AATと略す）が注目されてきている*。筆者はAATを、異なる2動物種間のコミュニケーションや行動様式の噛み合いで誘発される対象者の自発的な行動や反応（残存機能）を医療者が活用する療法と捉えながら、特別養護老人ホームでの小型犬の訪問活動を継続している。動物の発する物理化学的なメッセージが対象者の精神面あるいは肉体面に有益な刺激として働くことと考えるならば、動物の発するメッセージ、行動様式と人の反応との間に一定の相互関係があるであろう。もしそうであれば、医療者は動物の行動を操作することにより、対象者に有効な自発的な行動を常に誘発でき、効率的な機能訓練や心理的な誘導が可能となるはずである。

本稿では、訪問活動を実施施設での情緒的な慰問活動としてではなく、より多くの介護老人保健施設、介護療養型医療施設、グループ・ホームや在宅高齢者への場面でも応用できる小型犬活用技術構築のための研究活動と位置づけて

*脚注：「アニマル・セラピー」という言葉は概念が曖昧なので、本稿では動物介在療法 Animal Assisted Therapyの略語としてAATを使用する。

行ってきた事例研究の蓄積を踏まえ、小型犬の活用方法と効果について概要を紹介する。筆者らの活動では、治療対象者はもちろんのこと、動物と実施する人達にも心地良い緊張とくつろぎ、楽しい達成感をもたらす交流形態の創出を研究課題の一つとして挙げており、コミュニケーション円滑化の手段として遊びと動物への褒美の試用が特徴である。

II. AATとは

友好的な動物が人に好ましい生理的・身体機能的作用、精神的な作用、社会性の改善効果をもたらすことを利用して治療過程に動物を介在させることがAATである。AATでは医療者が治療・援助目標を設定し、観察記録および効果判定をしながら治療を行うが、動物を介在させることから、医療者の意向を汲んで動物と動物取扱者（飼主など）を選んで治療対象者（以下、対象者）と関わらせるコーディネーターおよび動物取扱者との協同作業でもある。AATでは治療・援助目標が設定されるので、使用動物はこの目標に適した動物が選択される。動物の備えるべき条件は、人獣共通感染源を持たず、人に対して友好的で危害を加えることがなく、有効な反応を引き出すための演出ができるように訓練されていることである。動物種でいえば、最も表情と表現力が豊かで、しかも人と似た社会性を持っている犬がよく用いられる。

III. 特別養護老人ホームでの実践

1. 対象者と治療、援助目標

AATの具体的な実施方法は対象者の状況の理解から始まる。特別養護老人ホーム入居者は「65歳以上の者であって、身体上又は精神上著しい障害があるために常時の介護を必要とし、かつ、居宅においてこれを受けることが困難なものが、やむを得ない事由により介護保険法に規定する介護老人福祉施設に入

所することが著しく困難である（老人福祉法第11条2項，1997年改正）」と認められた人々である。特別養護老人ホームは、重度の障害を持った高齢者の終の住処なのである。好むと好まざるとに関わらず入居した人達には、進行する障害から来る喪失感、不安、恐怖、認知障害により意思伝達がうまく行かなくなったもどかしさ、孤立感、自身の採食、排泄、更衣、入浴などを他人の手に委ねなければならない状態への苛立ち、自宅とは異なる集団生活環境での孤独感、帰宅願望などが強く認められる。これらがまた徘徊、介助への抵抗、攻撃・暴力行為などの行動異常の一要因になっている。また精神的な「落ち込み」によって、その人が入居前まで持っていた残存機能が介護者の目からも隠れてしまう可能性がある。さらにADL障害による活動性の低下で心身が衰え、手足の拘縮が進み介護の困難性を増すこともある。

特別養護老人ホームなど的高齢者福祉施設でのAATの目標は、Activity Careの一つとして可能な限り障害の進行を遅らせて人生の終局を不安の少ない状態で過ごす援助にあるが、対象者の精神状態の良転によりもたらされる介護者への協力の改善や家族の安堵もあわせて考慮すべき目標である。

入居者の多くは媚びられたり指示されることなく、ゆっくりと自分の話を聴いてくれて、自分をありのままに受け入れてくれる状況を求めている。物言わぬ友好的な動物は、対象者、医療者（医師、介護職、看護職、諸種療法士）、家族、ボランティアのすべてに共有できる話題を提供し、対象者の仕草を黙って受け入れてくれる。AATが人同士の掛け橋として有用な理由は、黙って受け入れてくれる点にある。そのくつろいだ雰囲気の中での医療者や家族の働きかけが、対象者を変えるのだと思う。

2. AAT活動の形態と医療者、動物の扱い者、ボランティアの相互連携

AAT活動の形態は、目的や実施者の考え方により多様である。筆者らは小型犬達との遊びの場を提供するという演出をしながら、対象者個々人の様子を医療者と援助者が観察し、目的に添って誘導する形態をとっている。AATが成果をあげるには、医療者が対象者の肯定的な面に関心を寄せ治療援助目標を

持つことが第一歩である。次にこの活動は、異業種の協同作業であるから、医療者と訪問活動側の双方が動物との交流の場面と動物のいない日常生活の両場面をみて、援助目標と援助方法について共通の認識を持ち、連携することが重要である。施設介護職員が「この人を犬との交流の場にお連れしたらどんな反応があるかしら」と思って、交流の場に参加させて様子を観察記録する。動物との交流の場面で見せる嬉しそうな表情や行動を、非常に貴重な残存能力の現れとみなす。その日の交流活動終了後の反省会で、医療者と訪問活動側のボランティアとが対象者の反応や犬への関わらせ方について意見交換し、「あら、この人にこんな積極的な一面があったのね」（能力の評価：assessment of enablement）、「じゃあ、日常の介護の中でもその効果を生かせないか、よく観察していきましょう」（援助計画の設定）と話を発展させて行く。ボランティアの側は入居者毎に接する担当者を決めて観察し、その記録を施設側に伝え（観察記録）、援助目標に沿って動物を使いながら誘導をして行く。たとえば、構音障害のある対象者には犬に命令を発してもらい、周囲の目を気にせず知らないうちに発語しているといった状況を創り出して行く。またボランティアが対象者をよく理解し、有効な援助ができるように、犬との交流日とは別の日に介護実習を受けさせて、対象者の日常の様子を観察する機会を作る。そうすると医療者、動物達、ボランティアの皆が対象者と顔なじみになるし、また対象者の良く変わって行く様子に喜びを覚えるので、疲労感の少ない楽しい訪問活動になる。交流の場に対象者の家族が参加することは家族の慰労にも役立つ。

3. 活動の作業手順と効果事例

作業手順を表1に、動物に対する反応評価記入用紙を表2に示した。また交流様式の概要を図1に示した。

〈第一段階〉

動物飼育歴を本人あるいは家族から聞き取る。

表1 動物介在療法支援の作業手順

- 第一段階：動物飼育歴を本人あるいは家族から聞き取る。
 第二段階：相性調査（表2で動物に対する初期反応の評価を行う）
 第三段階：治療援助目標の設定（内閉状態の軽減，徘徊軽減，友人づくり，機能訓練などQOLの向上）
 第四段階：動物との交流時に見せる自発的行動と反応のある交流様式を記録する。可能ならば録画する。
 第五段階：有効な交流を重ね自発的反応や行動を増数させる。効果判定のため計数する。
 第六段階：動物がいなくとも日常生活でのQOLが向上するように誘導する。
 評価にはRabins, P. V. が考案し鎌田ら（1999）が日本版に改善した痴呆高齢者QOLの評価尺度がある。

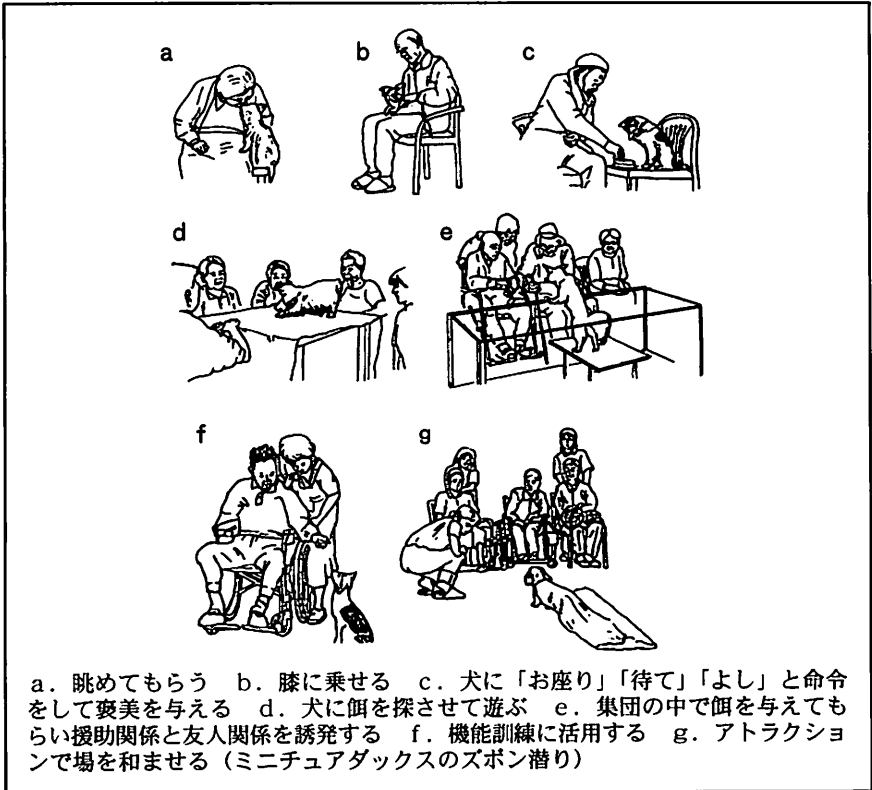


図1 小型犬との交流様式

〈第二段階〉

1) 動物に対する反応評価

対象者の動物との相性や態度（反応の型）を把握する。対象者の行動を観察し、筆者の考案した記入用紙（新山ほか，2002）（表2）の改良型をもちいて行う。評価項目は、相対的に単純と思われるA（見る）から、より複雑な要因の関係するB（触れる，膝に載せる），C（遊ぶ（お菓子を与える，物で遊ぶ）），D（周囲との関わり）の4つの概念からなる6項目とした。反応程度の評価は自発的な行動を尺度に，「0」を不快感あるいは「他人の居る場所に来ない」，「1」を「無関心」あるいは「周囲に無関心」，「2」を「微笑んだ」，「試みる」あるいは「周囲の人の動きに微笑み笑う」，「3」を「声を出し笑ったり，言葉を出した」「声を出し笑ったり，犬に声を掛けた」「引っ張り合う」あるいは「周囲の人と会話する」，「4」を「犬に声を掛けた」「自ら手を差し伸べ，犬を愛撫」「繰り返しを希望する，簡単な命令の実行」あるいは「周囲の人と物で交流する」の5段階とした。複雑で大きい反応ほど，神経系のより広い領域が活発に働いている，と評価するのである。記入はAからDへと順に関わらせ，該当する枠内の記述を丸で囲む形式で行った。この方法によって対象者の動物への態度の基本的なパターンを文字列で把握する。たとえば内閉的であった人が犬や周囲の人との関係で改善された場合，開始時A 1 Ba 1 Bb 1 Ca 1 Cb 1 D 1 から数ヵ月後の状態A 2 Ba 2 Bb 3 Ca 3 Cb 3 D 3 のように変化したと，簡略化して表す。さらにその時どんな風に振る舞ったか，とくに動物と相対した時に現れる反応のうち，動物がどのような行動をとった時に期待する肯定的な反応が得られたかを，看護領域で用いられるSOAP方式に沿ってより詳細に欄外に書き留めておく。それが普段の介護の場面では見せない認知能力や残存機能の発見の契機になるからである。こうした作業は毎回の交流後の意見交換の場で行われる。

2) 犬の関わらせ方

入居者の7割は痴呆性の障害があり，8割は車椅子使用者である。動きが緩慢で，不自由なことが多く，視覚聴覚障害もある。そこで，高齢者が恐怖心を

表2 反応評価記入用紙

犬の訪問日：

参加者：

* 該当項目の該当評価の部分の字句を囲む。

* 主たる関わり項目に印をつける。

反応評価	A 見る	Ba 触れる	Bb 膝に乗せる	Ca 褒美を与える	Cb 物で遊ぶ	D 周囲との関わり
4	子犬に声を掛け、動作で反応した。	自ら手を差し伸べ、子犬を愛撫。	自ら手を差し伸べ、子犬を愛撫。	繰り返しを希望する、簡単な命令の実行。	繰り返しを希望する。簡単な命令の実行。	周囲の人と物で交流する。
3	声を出し笑ったり、言葉を出した。	声を出し笑ったり、言葉を出した。	声を出し笑ったり、言葉を出した。	声を出し笑ったり、子犬に声を掛けた。	引っ張り合う。	周囲の人と会話する。
2	微笑んだ	微笑んだ。	微笑んだ。	微笑んだ。	試みる。	周囲の人の動きに微笑む、笑う。
1	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	周囲に無関心
0	不快感	不快感	不快感	不快感	不快感	他人の居る場所に来ない。

参加時の様子：

抱かないよう配慮する必要がある。まず犬の脇腹に手先を触れさせることから始める。小型犬の動きや体温で触れているものが自発的に動く生き物であることや安心して触れ得るものであることを認知してもらえたら、高齢者の意思に沿って、膝に乗せたり、抱かせたりする補助を行う。その際、必ず、「…をしていいですか」との声掛けをする。犬を顔に近づけたり、口元を舐めさせることをしてはならない。

〈第三段階〉

治療援助目標の設定：対象者の犬への反応の様子から、犬との交流が、内閉状態軽減、徘徊軽減、友人づくり、機能訓練、QOL向上などに活用できるかを判断する。活用を考慮したら、介護サービス計画（care plan）の activity careとして目標と着目点を記載する。

〈第四段階〉

最適な交流様式を選び、交流時の自発的行動の種類と大きさを記録計数する。交流の時間は、医療者が対象者と動物を介在させて信頼関係を構築する貴重な時間である。対象者が疲れない限り、動物の仕草などを話題にして声掛けや話を聞くことに努める。対象者の気に入った動物と関わり方および反応の仕方を記録する。

交流様式毎の期待できる効果は次のようなものである。

- ① 見ること：犬は4週齢以降に社会性が出てきて、人とは双方向の関係になる。普段会話の成立しない痴呆高齢者でも、犬をともに見ている時に会話が成立することがある。犬が共通の話題になったということの中に、彼女の記憶の中にある犬という動物のイメージを介護者が意思疎通をはかる手段として活用できるのではないかと思う。
- ② 膝に乗せる：温もりと被毛の感触で安心感を得る。うつ時の癒しがある。犬を撫で擦りし、支え直す自発的な反応を誘う。20年間アルツハイマー痴呆を患い、全介助で娘との会話も途絶えた犬飼育歴のある80歳代の女性に体重2kg以下の犬を触れさせたところ、乏しいが喜びの表情とともに顔面、項部、手背の表面温度の明らかな上昇を観測した。数回の交流で犬の

名前に反応するようになり、家族ともわずかながら意思疎通が可能となった。

- ③ 餌を与える：犬に「お座り」「待て」を命令し、実行したら「よし」といって餌を与えてもらう。自身の食事や排泄も他人任せにならざるを得ない日常生活を過ごす人にとって、自らの意思で命令したことを遂行してくれる犬の行動は、自尊と達成感をもたらす。またこの方法による機能訓練などへの誘導も可能であろう。

餌は、高齢者の「与えたい」気持ちと動物の達成感とを充たすために、ご褒美として細い棒状のジャーキーを長さ5mmに切断した小片を用いている。しかし餌は犬への強力な誘導物であり、犬が興奮し、制御困難になる可能性がある。餌の与え方に関して、医療者と援助者に対してその趣旨とやり方を徹底する必要がある。犬同士の牽制を排除するために1頭ごとに分離する。人と犬とが互いの表情をよく見合うように、犬を卓上に乗せる。犬が命令と褒美が対象者の意思で与えられるものと認知するように、対象者の表情にのみ集中するように、皿を必ず対象者と犬との間に置き、対象者に「よし」の合図（「よし」の発声と人差し指を皿中の餌に向けて振り下ろす動作）を行うよう、医療者あるいは援助者が誘導する。1卓に1頭の犬を乗せて、それを数人の高齢者が囲むように配置する場合でも、複数の人が同時に餌を見せて犬を呼ぶことはさせず、対象者と犬とが1対1で向き合うよう誘導する。痴呆高齢者が餌を食べないよう監視する必要がある。

- ④ 卓上での交流：対象者と犬の視線の高さが合い、表情が読みやすくなる。犬を囲んだ交流では、犬と共にほかの入居者の行動も眼にするので、入居者同士の交流が始まる。与える餌を順送りに回してもらうなどすると、友人づくりになる。施設生活の中で気心の知れた友人ができることは、大きな安心感につながる。
- ⑤ 集団の中での餌遣り：数人の見の中で餌を与えてもらうと、周囲の人が餌を持った対象者に「早くあげなさい。喜ぶから」と声を掛けて行動を促し、

援助する行為が見られる。褒美を待っている犬は参加者の共通の関心事であり、参加者間の交流の連結役として機能する。相性の良い入居者同士を発見したら、日常生活でも互いに気遣うように関係づける。

- ⑥ 遊び：「遊び」は対象者と犬、あるいは複数の対象者同士のコミュニケーションを複雑化し、心地良い緊張とくつろぎを連続させていく有効な手段である。一方的に犬に触れる、犬に命令して褒美として餌を与える、「ねんね」の命令で仰向けの姿勢をとらせるなどは、日頃から「…してもらう」立場にある高齢者にとっては自身が主体になるので自尊心の回復にとても良いが、犬の立場からみると命令を実行し「よし」の命令があるまで我慢を強いられるので、頻回あるいは長時間行うと次第に疲れを示す。これに比べて隠してある餌を探す遊びは人間を気にせず犬自身の欲求で行う行動なので、頻回かつ長時間続けても疲れずに実行する。この遊びは対象者にとって、遊びを仕掛ける喜びと犬の工夫行動を見る喜びが含まれていて、退屈することが少ない。医療者にとっても、犬の行動が複雑であることにより多くの話題が手に入り、対象者と1対1で向かい合う時ほどの疲れを感じることなく、対象者の残存能力を観察できる。
- ⑦ 犬との散歩で信頼関係確立：散歩中、治療者が話し掛けることで信頼関係が生まれる。内閉的傾向が強く独語と介助への抵抗が強かった人の症状が軽減し、介助に協力的になった事例がある。
- ⑧ 出し物：犬の好きな遊びで演出し、犬を被拘束感から解放する。また対象者にも声を掛けて参加してもらう型にすると交流の場の雰囲気が一つにまとまる。

〈第五段階〉

有効な交流を重ね自発的反応や行動を増数させる。効果判定のため計数する。痴呆や障害などがあって言語で自己表現のできない入居者に対する短期的な変化の効果判定には、非接触性の観察機器（ビデオ、赤外線温度測定用カメラなど）による記録で、また重度の障害を持つ高齢者への長期間にわたるAATの効果判定には、行動上の変化、たとえば異常行動の発現数と質の変化を数量化

して、計数する手法を追求している。

〈第六段階〉

動物との交流時に見られた好ましい効果を、動物のいない日常へと波及するように誘導する。行動障害の軽減、医療者（介護者、看護師、療法士など）に協力的になること、対人関係の改善などが目標になる。手段としては交流時の出来事や写真、交流時に把握できたその人にとっての楽しい話題、以前飼育していた動物の話などが、医療者との掛け橋になる。各医療分野での個別評価方法のほかに、痴呆高齢者QOLの評価には、Rabinsや鎌田ら（鎌田ら、1999）の評価尺度や、臨床心理学領域で利用されている評価方法を用いる。事例を報告書にする。

IV. おわりに

筆者は医療者ではないので、「AATを人と犬との関わりの活用」の観点から記述した。AATは複合領域であり、多くの医療専門家、社会学専門家が加わることで、より多彩な活動形態と研究がなされるはずである。それを期待したい。

引用文献

- 1) 新山雅美, 新山春江, 森田茂, 杉山善朗 (2002): 特別養護老人ホームにおける小型犬の訪問活動の効果とQOLへの波及, 老人ケア研究, 16, 1-9.
- 2) 鎌田ケイ子, 阿部俊子, 山本則子他 (1999): 痴呆高齢者の生活の質(QOL)尺度の開発, 老人ケア研究, 10, 1-7.